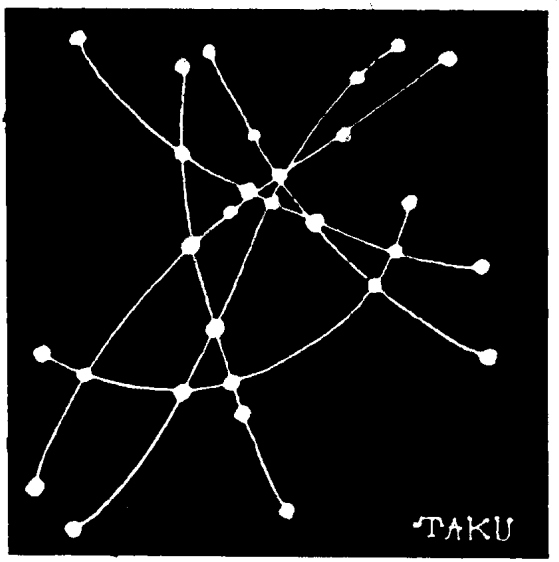
机上枕上步上　佐藤春夫

貝殼追放　水上瀧太郎

現代日本隨筆選

佐藤春夫　**机上枕上歩上**

水上瀧太郎　**貝殻追放**



筑摩書房・現代日本隨筆選 8

机上枕上歩上・貝殻追放
—現代日本随筆選8—
佐藤春夫
水上瀧太郎

發行者　古田晁
東京都文京區台町9

印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町1の23

發行所
株式會社 筑摩書房　東京都文京區台町
振替 東京 165768

昭和29年1月15日 印刷
昭和29年1月20日 發行

定価 230円
(地方賣價 240円)

聯印刷株式會社印刷・黒田製本

目次

机上枕上歩上

青春の憂鬱 5
新進作家の今昔 13
批評への渇望 18
小泉信三氏訪問記 30
若き日の久米正雄 37
堀辰雄のこと 42
廣島日記 46
恐山半島記 54
洪水のはなし 65
「菊花の約」を讀む 72

佐藤春夫

戀し鳥の記 78
黄菊白菊 83
わが父わが母及びその子われ 84
わが戀愛生活を問はれて 89
好き友 90
季節・秋の季節 93
秋花七種 95
美人論 102
兼好と長明と 110

貝殻追放

水上瀧太郎

2
先生の忠告 129
兵隊ごっこ 141
女人崇拜 152
初夢 160
札の辻——櫻田門 170
日曜の癇癪 177
先驅者 183
撒水車 190
大人の眼と子供の眼 198
所感 206
友はえらぶ可し 211
はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記 218
島崎藤村先生の足跡 225

裝幀 岩崎鐸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

机上枕上歩上

佐藤春夫

著者紹介

明治二十五年四月和歌山縣新宮町に醫家の長男として生る。中學時代から文學に志し、上京して生田長江、與謝野寛に師事し、慶應義塾にて永井荷風の教えを受く。學友に堀口大學がいた。初め詩人として出發し「殉情詩集」を出し、やがて小說「田園の憂鬱」により新進作家としての聲價を一躍高めた。日本、中國の古典に造詣深く、わが文學史上ユニークな作家として、今日に至る。

青春の憂鬱

蓋の謝し薔薇が代るごとに私は天の惠福が自分と共にあつた間、私が十分それを重んじなかつたといふ惧れを感じた。……私は心の辯解するところを疑惑し且つ慚愧して聞く

——「ヘンリ・ライクロフト手記」

ニイチエは青年時代を不愉快であると斷案して、その理由をも說明してゐたが、今はもう忘れた。萬人の青年時代が必ず不愉快かどうかは知らないが、自分に關する限り青年時代は正しく不愉快であり、憂鬱であつた。

よく遊び、よく學んで樂しかるべき學生生活を自分で拒否してしまつた事が、自分に青春らしい青春のない所以であらうが、自分は早く中學三年頃から教育に對する疑惑を抱き、一二年後はそれがはつきりと不信になつた。

一切の教育を信ぜず、生意氣にも自分の運命と才能を自信して獨自の道を歩まうと決意しながら、不徹底にも家庭に屈服し妥協した。

經濟上の獨立が出來なかつたから家庭に寄生した當然の結果であつた。

自分の家庭が正面から敢然と抗爭してそれを壞滅しなければならない程、頑迷な家庭でなかつたのがかへつて不幸であつた。妥協の間に穏和に一歩々々自分の意志を實現してやらうと思つたのは親に甘えてゐるといふやうな氣持であつたらしいが、ともかくも狡い考であつた。

かういふ氣の弱さとそれに伴ふ狡さとは自分の性情の純粹を甚だ傷けてゐる事を時々は反省して、それが先天的なものか、或は中學校時代に學校と家庭とに處する間に生れた後天的なものであらうか、然らば、これも亦わが青春の殘滓と見るべきであると自らにがにがしく思ふ。

何しろ根本にかういふごまかしを藏してゐる事を自覺してゐる青春が明朗であらう筈はなかつた。

そも〳〵中學を出た時から滿足な出方ではなかつた。學校では追放する代りに卒業させたやうなつもりであつたに

違ひないと自分はさう感じてゐる。

高等學校の入學試驗は家庭への申しわけに受けては見たが、三日目に春雷の鳴つたのをいい事にして、受驗には行かなかつた。下宿の人が心配して、何度も起しに來たのを、もう昨日落第してゐると言つて起きなかつた。

その秋三田の學校に入學したのも家庭から學費を出して貰ふ必要上の手段であつたから、學校は怠け放題怠けて出來る限り長く籍を置いておかうといふ魂膽であつた。さうして學校では何も習はない代りに自分の好きな事だけは獨學で身につけようといふ方針であつた。どうせ自分の好きな事より外は出來ない性質だと自分で決めて、それを改めようとする氣もなかつた。

三田の學塾には明治四十二年秋から大正三年春まで足かけ六年位はゐたらしい。十八から二十三までだが、その間にたつた一度だけ進級したと思ふ。久保田万太郎がはじめは一級上であつたが、文壇へ花々しくする一方ずんずん進級して卒業して行つた。下級には小島政二郎がゐた筈だがいつ入學したのであつたらうか。學校の記憶は甚だあいまい朦朧としてゐる。

學校にゐるとは名ばかりで授業に學校へ出るでもなく學校へは遊び友達をみつけに出かけるだけなのだから、進級しないのが當然であつた。授業も受けず進級もしないから、何年在學——といふよりも在籍と言はなければならない——したものやらその當時さへ明確な認識はなかつたのだから、三十年以上經つた今日になつてそれを思ひ出さうといふのが自體無理であらう。

さすがに家庭でも少々怪しいと氣がついたものか三年目ぐらゐから末弟を東京の中學校へ入學させると決めた序に母や叔母が出京して一戸を構へ、監督を強化して自分達を通學させてくれた。しかし自分は家庭では割合によく讀書してゐたし（それがたとひ何であらうと）學校へは毎日遊び友達をさがしに出て適當な相手を見つけては適當な時間、適當に遊んで歸つたから、格別にさう怠けてゐるやうな樣子にも見えなかつたらしい。

學校の保證人は毎學期の自分の成績をみてもたゞあきれ返つてゐるだけであつた。最初こそ嚴重な訓戒をしてくれたが、それも馬耳東風なのを見てもう愛憎をつかしたばかり、そんなことをくど〳〵と述べたてるのを野暮たらしいと思ふ類の人であつた。たゞ時々自分に獨學の指針だけを與へてくれた。

體質に適しなかつたと見えて自然とやまつたがその頃は酒も少しは飲んだし、酒を飲むと腹の立つ惡い癖があつた。全く箸にも棒にもかからぬ若者であつたらう。今にして思へば東京でそんな不良文學青年風の學校生活をしてゐるよりは熊野山中で炭燒小屋にでもゐた方が餘程ましであつたらう。

たしか二十三の春であつたらう。冬の終から春にかけて寢汗をしたり朝晩微熱がつづいて咽喉が惡かつた。それが二三ヶ月續いて體が例になく大儀に感じられた。自分は父母の立派な體質を受けて少年時代から今日まで自分でも不思議な程頑健であるが、二三年前事のついでに健康診斷をして貰つたら、肺に舊くそれを病んだ相當な痕跡をとどめてゐるが、心當りはないかと問はれて、はじめて二十三の春の事を思い出してそれであつたかと思ふのである。さういふ無意味な學校生活にもそろそろ飽いて來た折からではあつたし、この病氣を機會に學校はやめる事にした。退學屆などは面倒だから月謝を滯納して置いたら自然先方から退學してくれた。

その頃、父の昔の學生仲間で同じ地方で醫者を開業してゐる人の長男で自分と同じ年の人が大學を一番で卒業したとかで、父は常にその事を母に言ひ出して不肖の後を歎いてゐたといふ。自分の父は、わが父ながら豐かな才能を持つた人で醫學校でも拔群の成績で出て、當然給費生となつて大學に入學出來る資格があつたのに、生憎とその年から給費生の制度が廢止されたとか。家庭の事情の事などもいつも不運な人で、折角の才能をいだきながら田舍に埋もれてしまつたのを悲しんで、自分の遂げられなかつた希望を子供によつて達成しようと考へてゐる人であつた。さうしてその他の點では實によく判る人であつたにも拘はらず所謂、立身出世、成功、名譽慾といふ點にかけては氣の毒なと思ふばかり執着のある人であつた。自分は當時からそれを不快に思ひ、さういふ義務を負はされるのは閉口だと心ひそかに反抗の念を抱いてゐたから官立の學校へも入らず、私立學校さへ滿足に卒業しないのを、聊か痛快に思つたものであつた。父が自分に文學を許したのは詩人や作家になる事を承認したのではなく文學博士にするつもりであつたのだ。自分もはじめは日本美術史でも專攻していいような顏をしてゐた。自分はまんまと父を裏切つたわけである。自分の學生時代父が自分の身の上を案じて自分の常に敎を受けてゐた與謝野寛先生や馬場孤蝶先生、生田長江先

生に自分に關する心配を訴へたのに對して三先生から頂いた手紙を大切に自分で夜鶴集と題して一軸の卷物にしたてて保存してゐる。それは三先生と父との紀念として自分も身邊から離さないで持つてゐるが、それをみると、さすがに我が事ながらも昔日の自分を不埒なと思ふ。

三先生に關聯して思ひ出したが、その頃自分は長江先生の紹介で森田草平、近松秋江氏などの門にもよく遊んだ。はじめは長江先生のお伴をしたのだと思ふ。なほ三田關係以外の文壇名家では岩野泡鳴、鈴木三重吉氏などにもこの頃お目にかかつた事があつた。友人は同學の堀口大學とは級も同じく志も似て最も親しかつたが、外にもう一人生方克三といふのがゐて、その後十年ばかり前までは時々顔を見せてゐたのにそのうちにまた消息がわからなくなつてしまつたのはさびしい。學校の同級はこの三人だけであつた。

三田に在學中「白樺」と「スバル」と「三田文學」との同人の親睦會のやうな會が一度あつて、三田の學校の食堂で催されて武者、里見、菅野二十一氏などの顔はこの時覺えたが、志賀さんが席上に居られたかどうかは思ひ出せない。白樺は自分のはじめて東京に出た年に創刊されて、自分は創刊號からの愛讀者であつた。その席上自己紹介の事があつた時自分の隣席にゐた生方克三が自分に「自己紹介はきまりが悪いからおれはお前を紹介する。お前おれを紹介しろ」と囁いて立つたと思つたら「この僕の隣にゐる奴が佐藤春夫といふ三田の文科第一の不良少年」とか何とかいつて面くらはせたのでその後から自分が生方を指して「これが不良少年の子分とか」何とか言つてやつた事だけをおぼえてゐる。きまりが悪かつたからであらう。

三田の學生時代の自分に就いてはさまざまな傳說が傳へられてゐる。例へば日向葵の花を胸に挿して銀座を歩いてゐたなどといふのはオスカーワイルドと自分とを混同してゐるのであらう。また自分が大富豪の息子で豪華な生活者だなどといふ頗る景氣のいい話などもあつたらしいが、これは秋江氏あたりから早稻田の學生が何かに話したのが遺傳したのであらうと思はれる。いつぞや廣津氏が三田の頃の自分の話を言ひ出して「このごろいいオマ〇〇があつてね」と初對面に突然話し出されてそのデカダン氣取に面くらつていやな奴だと思つたとかいふのであつたが、なるほどさう聞いたら驚いたらうが事實は「オオマアカイヤムのいい本がある」と話したのが自分の早口の田舍訛のせいで

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

さう聞えたものらしい。自分は○○○などと町中で用もない人に話し出すのは今でも恥かしい。二十代には無論そんな勇氣はなかつたからである。我々の仲間ではその頃オオマアカイヤム熱が盛で丸善にタゴールの挿畫の大型のいい本があるのが高くて買へないのをみな殘念に思つてゐた頃の事らしい。多分早稻田の方ではオオマアカイヤムなどといふへんな名前は珍らしかつたせいであらう。またある時自分が英譯のニイチエ全集を小脇にかかへ込んで本鄉の通りを濶歩してゐたといふ話もある。さういふ記憶は自分にはないし、英譯ニイチエ全集は小脇にかい込むにはちと大部だが、風呂敷かなんかにくるんで運んでゐた事はあらう。實はそれをそつくり本鄉の質屋へ運んだ事實はあつた。

三田の學生時代をバラッド風に歌つたものがあるがここには記さない。また水上瀧太郎が三田時代の自分を何首かの連作にして歌にしたものがあつたがこれは忘れた。思へばなかなかの人氣者であつた。

學校をやめた年、自分は猶豫の無くなつた徵兵檢査を直ぐ受ける事にした。自分はあまりだらしなくなつてゐる自分の日常生活を自分でも持てあまして、一そ徵兵にとられて一年位兵營のきびしい生活でたたきのめされて來るのも一方法だと思つた程であつた。それで父母は壯丁の强壯なのが多い田舍で體格檢査を受けた方がよからうといふのを無視して、當時居住の牛込區役所で受ける事にした。一たいが痩せつぽちでいつも十二貫前後といふので丁種合格であつた。丁種といふのは不具癈疾なみの體格だといふ、蟲齒の手入をしたらよからうなどと云はれた。又自分の職業を問はれたから、

「この間までは學生であつたが今は學校をやめたから何もしてゐない」と答へると、學校をやめて何ヶ月になるかと追及した上で、

「大の男で相當の教育もある者が何もしないで遊んでゐるといふ事があるか」と叱られたから

「はい、この間までは病氣をしてゐました。」

と答へたら、もう叱らなかつた。

軍縮の頃で徵兵がゆるやかになつてゐたうへに、東京の牛込あたりは上流家庭の子弟が多いとやらで檢査官のあまり威張らない所になつてゐると後に人から聞いた。そのせいかどうか噂に聞くやうなひどい目にはあはなかつた。

いやなインチキ學生をやめたと思ふと、半年も經たない

うちに又別の形態でいやな生活者とならざるを得なかつた。

自分がひとりの女を見つけて故郷へ連れて歸つたのは學校をやめた時の冬であつたかと思ふ。家庭ではもうすつかり自分には愛憎を盡かして了まつてゐたから何の文句も言はなかつた代りに、そんな若さで自分の口一つをさへ糊することも出來ない者が妻を持つといふ事の無理を一どほりは非難したが、自分の子はとにかく、他家の娘を干ぼしにしておく事も出來ないから二十五になるまではまだ學校にゐると思つて特別に學資のつもりで今までどほり月々の仕送りをしてやらう。それで夫婦の生活が出來るか出來ないかはしらない。多分むつかしからうとは思ふが、やつて見て出來なければ女房に食はせて殘りを自分が食ふつもりで居なければならない。いよ〳〵苦しくなつたら、何なりと勝手に自活の方法を講ぜよといふのであつた。

かういふ宣告の一方、結婚に關しては相當の費用をも惜しまず支出してくれたから、その後しばらくは、月々の仕送りの足りないところを女房の着物や自分のものを典物としてどうやら暮してゆく事が出來た。さういふやりくりはみな女房の實家の母親がその難局に當つてくれたものであつた。それでも當然典物がなくなつて質屋の利子に追はれるやうになつた頃、思ひついたことは東京近郊に土地を買ひ自分の住宅を建てる事を家庭に賴んでみる事であつた。これは女房の父親たる大藏省の屬であつた人が自分の父に交渉して納得させてくれた。その結果として自分の手に入つたのが二十五歳の年末に自分の書いた「田園の憂鬱」の土地である。

坪八十錢かそこらの山林地帶が一圓五十錢ぐらゐに報告されて千二三百坪もあつたから土地の外に小千圓の金が自分の手に入つたわけである。何の事はない自分は女房の父親と共謀して自分の父からこれを欺取したわけである。女房の母親の方は少々感心出來ない節もあつたが、それでも金錢上の事は正直であつたし、父親と來たら至極の好人物であつたから、娘のためにさういふ苦策の主謀者とはなつたものの、びた一文着服したわけではなかつた。聞けばその後幾程もなく沒して今は故人ではあるがその名譽のために特記して置かう。それにしても千圓にも足りない小錢で、たとひ大正の初年とはいへ、普通に使つたらせいぜい三四月でなくなるのだから、そこで考へたのは神奈川在へ引き籠つて出來るだけ金のかからない生活をしようといふ策であ

つた。當時この地方ではまだ盆と節季の二期に支拂へばよいといふ舊い風習が殘つてゐたから、月々の暮しのために月々債鬼に惱まされないでも濟んだといふ便宜もあつたのである。はじめは少くも二、三年はその地で暮すつもりであつたのが、四月の末から十一月始めぐらゐまで、ほんの半歲かそこらで引上て了つた。自分はもと〳〵田舍暮しには向く性質であつたが、妻の方が參つてしまつたのである。

學生の頃から自分は若干の抒情詩などを書いて「スバル」や「三田文學」などに出して貰つてゐた。その頃の作のうち、抒情詩の三分の一足らずが今も殘つて自分の詩集に採錄されてゐる。一たいに當時寡作であつたのを、後年自分で思ひ出すことの出來るものだけを採つた結果、思ひ出せるのが少くて嚴選といふ形になつて、集の中でも、惡くない部分らしい。たとへば「夕づつに寄す」とか「ためいき」「少年の日」「犬吠岬旅情歌」などの類である。友人堀口大學の意見によると自分の抒情詩中最上のものは皆このころの作だといふが、自分ではさうばかりも思ひたくはないが、まづ一とほりのものを作れるやうになつてはゐたと思ふ。自分はどうやら生れ乍らの抒情詩人らしいが當時の自分はその自覺もなくまたそれで滿足出來ない野心もあつて、志は散文にあつた。時々筆慣らしのつもりで何か書いては見たが、それがいつも五六枚かせいぜい十枚ぐらゐで厭になつて了ふ。書きつゞければ書けないでもないが、書きながら少しも樂しくない。詩を書くやうには樂しくない。理由をいろ〳〵と考へてみて自分に似つかはしい文體をまだみつける事が出來ないからであると判斷した。自分はそのころ平易で淡々たるさうして透明なプレインソーダーのやうな文體といふものを夢想し憧憬してゐた。しかも、その憧憬の對象は、自分でごく自然に出來上る文章とまるでうらはらのやうな文體が望ましいのであつた。しかし文體といふものは所詮氣質である。人それぞれに持つて生れてゐるもので、それは性格や生活から改善してかゝらない限りは容易に變へられるものではない。

けれどもその時はそこまでは會得する事が出來ないから、原稿紙の上にペンで思ひのまゝの文體が出來るものと考へたらしく、自分の氣質や文章の內容などと切り放して文體といふものを模索するほど自分は幼稚であつたから、ただ意固地になつて無駄な骨折をしてゐた。後に芥川にその話をしたら芥川は笑ひながら、自分の空しい努力に同情

し、それでももうすこしねばり强くそれをやつてみればよかつたと批評してくれた。實際も少しねばり强く腰を据ゑて文體と一緒に自分の氣質や人生觀まで變るほど文體の苦勞をしてみるのも好かつた――ではない必要な事であつたらうと思ふ。その暗中模索でくたびれ切つて、自分は少年時代から多少自信のある畫才を試してみようと思ひ立つたのは、當時の友人に廣川松五郎だの廣島光甫などがゐたのと、フュザン會や二科會の創立など美術界に新しい潮流が現れたためであつた。今までまだ用ゐた事のない油彩の繪具で自分の自畫像だの二三の靜物の小品を作つた。折から文化學院創立の前後で西村伊作氏は石井柏亭と親しく、自分は鄉里の知人で西村夫人の一族に當る人の家庭で世話になつてゐたので偶〻西村氏と一緒に來合せた石井氏の示敎を仰がうと、西村氏の激勵もあり、石井氏には以前鄉里の方へ來遊の機會にお目にかかつてもゐたし思ひ切つておそるおそる試作を靈伯の面前に出して見ると石井氏は溫顏を素人畫に向けたまゝしばらく注視してゐたが、やがて西村氏を顧みてデッサンの歪みなどを畫面の上を指頭で正し說明しなどして居られたが、最後に自分に向つて

「デッサンなどはずゐ分でたらめなものとは思ふが、よく見ると、その歪みにも何か心理的に同感出來るところもあり、色彩も惡くない」

と語つてから西村氏に

「素人の强みがよく出たところは買へますね。素質はあります。この程度なら二科でも採れたでせう」

と思ひの外に好評なので、自分も嬉しくなつてそれから多少自信を持つて描きつづけて翌年の二科に自畫像と外に靜物の小品を二點出してみると自畫像と靜物一點と合せて二點入選した。二科會の第二回展覽會である。これを始として第三回、第四回にもつづいて二點づつ入選した。第三回の時に出した「猫と女」といふのは田園で一緒に生活した女や猫を描いたもので、自分でも多少氣に入つた出來榮であつたが、會から送り返してもらふ時に會では神奈川の方へ送つたのに、自分は東京へ出て來てしまつてゐたので神奈川から東京へ轉送中どこかへ紛れて見失はれたきり自分のところへは歸らなかつた。この頃の畫は、今手元に自畫像の外は朱塗の汁わんや小皿箸など朝飯の後の食卓を描いた小品が一點と北海道の弟のところに「上野停車場附近」といふのがずゐ分變色して殘骸をさらしてゐるらしい。先年寛先生がおくなりの後、與謝野邸の應接間に多分第三回

選のものかと覺えてゐる「椿」の小品が梅原氏や正宗氏などの作品に雜つて飾られてゐるのをみた。幸ひこれは色も變らずなつかしく見ながらも諸大家に伍してゐるのを氣恥かしく思つてゐると晶子先生は早くもこれを察して「これは當分このままにさせて頂きます。故人が以前に飾つたまゝですから」と仰言つて下さつたのには益々恐縮した。(纏らないが、紙員も盡き期日も來たので)

(昭和二十一年)

新進作家の今昔

かういふ題をくれた。しかし新進作家とは昔も今も要するにぼうふらに翅が生えて水たまりから飛び立つたばかりの事をいふので、その狀態そのものは昔も今も大して變化のあるものとは思へない。何か變りがあるとすれば、ぼうふらの住んでゐた水たまりや、飛び立つた蚊に對する周圍の狀態、例へばむかしはDDTなどはなかつたとか。そんな點、つまり新進作家の今昔といふより、文壇の今昔といふ事になつてしまつて問題から逸しさうである。それで落第を免れるために少しく伺を立ててみると、貴公は新進作家といふものを長い年月に渉つて見て來てゐるだらうから、その間定めし面白い見聞や感想もあるだらうと、出題の主旨を說明してくれた。

格別に面白い見聞も氣の利いた感想もありはしないが、

ずゐぶんと澤山な新進作家だけは正しく見て來てゐる。つまり乃公年をとつたといふだけの事だが、それを賣り物にせよとか、とかく書きたい事は書かせてくれないで好もしくない事をさせたがるのは昔も今も變らぬ憂き世である。ままよ、OK。

ところで現在の大家でその新進作家時代を知らないのは柳浪門下にゐた當時の荷風先生ぐらゐなもので、その他の先生方なら白鳥にしろ未明にしろみなその新進作家時代の活動をも事のはじめから知らないではない。荷風だつて新歸朝後、歸り新參の新進作家時代ならば存じてゐる。白鳥未明以後谷崎志賀里見武者小路長與久保田などに到つてはその新進作家時代を目前に見てゐる。宇野廣津、青野室生などは乃公と同じ頃相前後した新進であつた。あの頃は皆、髪が黑くて、それも額の上の眉に近く密生してゐた。さうして今日のやうなイケスカナイ爺になりさうに見えたのは誰一人もゐなかつた。ほぼ半世紀にわたる文壇の推移とその間に輩出した新進作家といふものをかうして點檢して見ると現存してゐるのは僅に十指に少しくあまるのみの、寥寥たるもので多くは黃土に歸した。人生の無常迅速をそぞろに感ずるばかりである。自分たちの時代以後の新進でさへも或は他界し、或は文壇以外に流出してしまつた人材も尠くない。

さういふ月並な感慨は別として、この半世紀間の新進作家の出現を回想してみると、時代によつて多量に群れて出たのと、さうでないのとの區別が先づ目につく。それは作家の質や力量とによるものではなく文壇もしくは文藝思潮の動きに支配された現象である。明治も末に近く自然主義運動によつて群出した新進作家、そのうちの雄として今もなほ健在なのが白鳥であるが、その自然主義運動が時代の役割を果して、自然主義作家の後退するに當つて反自然主義とも云ふべき反動的な時代、明治末から大正初期に群出した新進作家の一群、荷風は文壇への歸り新參といふ意味で別格として小說の谷崎、長田幹彥、詩歌の白秋、吉井勇。白樺同人の面面、つづいて新思潮の諸同人など文壇の全面的な交替期だけにどやどやと大量に出現したわけで、この時期の終に近くなつて、そのどさくさまぎれに、乃公なども浮び上つたわけであつたが、この自然主義時代とまた反動自然主義時代（と假りにさう呼んで置かう）とが自分の知る限りでは、最も多く種々雜多な新進作家の出た時代で、當時の文壇の樣子や花々しい新進作家の生態とは長

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook